

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

## 檸檬と丸善

勝又, 浩

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

134

(終了ページ / End Page)

138

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019500>

## 檸檬と丸善

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みぢんだらう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで彩つてゐる京極を下つて行つた。

よく知られた梶井基次郎『檸檬』の結末部分である。この結末——言い換えれば、爆破するのがなぜ丸善なのか、というのが、いま私の問うてみたいことである。

一顆のレモンを爆弾に見たてて丸善を木端微塵にするという空想が、一時にもせよ主人公の抱えた鬱情をふきとばしたとはどういうことなのか。主人公は、下宿代も滞って友人の部屋を転々と渡り歩

いているような貧乏学生なのだから、「大爆発」して消えてしまえば好都合なもの、溜飲のさがる思いをするようなものは他にいくらでもあったらうに、彼はなぜ丸善を選んだのだろうか。

その理由のごく表面的なことをあげれば、その頃の主人公にとっては、丸善が「重くるしい場所」「気詰り」な存在になっていたからだ、ということがある。だが、なぜそうなのか。

作中にそうとことわられてはいないが、主人公はあきらかに京都・第三高等学校の学生であるから、優等生ではないまでも、彼がもう少し常識的な、あたりまえな学生であったならば、丸善はむしろ彼らの誇りや特権を確認する「場所」であった。ことはまず、そういうところから考えなくてはならないだらう。高価な美術書、古今の思想文芸の原書から舶来雑貨にいたるまで、それらの価値や意味や美しさを知り、用いることができるのは、彼らと彼らにつながるごく限られた少数の者たちばかりだったのである。しかも、日本の文明文化は、こうした品々をわがものとする人たちによってつくられ

勝 又 浩

してきたし、つくられて行かねばならない、と。「丸善」とはそういう意味であるだろう。

「外国書の輸入を一手に引受けて、日本の最高の知識層もその店に居るのに何がしかの誇りと愉悅とを感じるに違いない」（佐多稲子『私の東京地図』）と、これは東京のことだが、同じ頃の丸善を店員の側から見ていることばである。『私の東京地図』については別に更めて考えたいが、ともあれ、『檸檬』の主人公においても、「生活がまだ蝕れてゐなかつた以前私の好きであつた所」としてためらいなくあげている「丸善」、買物の目的があるわけでもないそこで漫然と「小一時間も費すことがあつた」と言っている「丸善」とは、そういう「場所」、そういう存在なのである。

ところが、或いはそれ故にいっそう、現在の彼にはそれが「重くらしい場所」「気語り」な存在となつてしまった。なぜなら、貧乏と病氣、あやしくなる卒業、そして彼のことで言えば「蝕れた」生活が、彼を通常の学生という方から凋落させてしまったから。勤勉な学生にとっては、約束された将来の特権を確める場所だが、怠惰な落第学生、学生失格者である彼にとっては、それは逆転して、己れの逸脱を責め苛まれる場所になつてしまった、というわけである。

「もう其頃の私にとつては重くらしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のやうに私には見えるのだつた」と。この「借金取」が単に金銭のそればかりではないこと、精神的、文化的、社会階層的なそれ、言わば学生としての特権そのものからの「借金取」であることに注意しなければならぬ。「書

籍」——豪華な美術書類、高踏なる学芸の原書ども——輸入されたそうしたものどもからたくさん「借金」をしつつ、彼はこれまで成長してきたのであるから。従つて、当然のことながらこの「借金取」は丸善ばかりに居るのではなかつた。

以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何か私を居堪らずさせるのだ。

こんなふうに「借金取」はいたるところにいる。そして、こんなふうに丸善的なもの一切へのアレルギーに陥つた主人公は、「借金取の亡霊」の出でこない、日本のなかの非丸善的なところをもとめて、街々を「浮浪」し続ける。

何故だか其頃私は見すばらしく美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたり、がらくたが転してあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた……

私はまたあの花火といふ奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つばい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの模様を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火といふのは一つづつ輪になつてゐる箱に詰めてあ

る。そんなものが変に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろといふ色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた……

丸善的なものからひたすら遁走する彼は、こうして駄菓子屋の前に立ちどまり、乾物屋の店先を覗きつつ街裏をさまよひ歩く。これらのものものが、彼のまだ「借金」以前、丸善的なものに毒される以前の、「幼時のあまい記憶」につながっているが故に、いま「落魄」された「彼にはこころよい慰めであることを、彼は半ば承知している。そうしてある日、めずらしくその日はレモンを並べていた果物屋——と言つたつて、どこにでもあるような「八百屋に過ぎなかつた」のだが——にぶつかる。むろん、その果物屋も、その頃の彼が好んだ「見すばらしくて美しいもの」のひとつ、非丸善的な眺めのひとつだったのである。だから彼も「此処でちよつと其果物屋を紹介したい」と、わざわざことわるのだが、しかし、彼のその「紹介」のことば——

何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリュームに凝り固まつたといふ風に果物は並んでゐる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれてゐる。——  
実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかつた。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

「快速調の流れ」「ゴルゴンの鬼面」「あんな色彩やあんなヴォリューム」——これらのことばの舶来臭さはいつたかどうか。これが、人参や豆や慈姑を並べた「八百屋」の形容なのか。これが、「どんな美しい音楽も」、「最初の二三小節で」「居堪ら」なくなる、と言つた人物の使うべきことばなのか。これが、丸善的なもの一切への拒絶症にかかつた、という人物の頭のなかなのか……丸善が象徴しているような世界から凋落した彼は、ひとつ裏通りには健在する非丸善的な日本の風景を索めては心を慰めている。しかし、そうして気に入つた眺めをスケッチしてみれば、それは無意識のうちに、かつて丸善で購つた「一等しい鉛筆」の厄介になつてしまわざるを得ないのである。再発見したはずの「安っぽい絵具」を上手に使うようなことは、彼にはもはやできなくなつてゐるらしい。このにわか浮世絵師は、だから八百屋で見つけたレモン一個で、たちまち昨日までの憧れ、西洋油絵画家に逆戻りしてしまつたわけである。

一顆のレモンを手にして、奇跡のように「軽やかな昂奮」を掴むことのできた彼は、「一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思ひ浮べては歩いてゐた」と言う。祭文語りが一転して吟遊詩人になつたような趣きではないか。だからここでも、それが、「どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた」などと言つた男のせりふだろるか、と皮肉を言えば言えないこともない。だが、いまは、久しぶりに旧制高校生的な精神が蘇つてきたといふ彼の「気持」を尊重することとしよう。

この変身に氣をよくした彼は、その魔法のランプレモンを懐に

して、久しく遠ざかっていた丸善に乗り込んだわけである。「然しどうしたことだらう、私の心を充してゐた幸福な感情は段々逃げて行つた」。魔法のランプは、そこでは一向に効きめがなかったらしい。そして再び「憂鬱が立て<sup>た</sup>てて来る」。西洋の出店、日本の総代理店のなかでは、さすがにわか変身の詩人では誤魔化せなかつたらしい。この、誤魔化せなかつたと感じている彼を、私は信じた

い。  
こんなふうに見てくると、『檸檬』の爆弾がなぜレモンでなければならなかつたか、ということもおのずから見えてくるようだ。彼が鼠花火やびいどろの世界にすっかり回帰していれば、そのときにはもはや丸善などを權威とも「気詰り」とも意識することはなかつたはずだが、丸善的なものをまだ捨てきるまでには行かない彼としては、「見すばらしくて美しいもの」を発見し、それに惹かれながらも、彼のなかではなお、それは丸善的な世界にも通用するものでなければならなかつたのである。言い換えれば、「借金」にならぬほどの西洋、そういうお守りが彼には是非とも必要だったのであるが、それが八百屋にあったレモンという存在だったわけである。

しかし、そうだとすると、彼はいったい何から逃がれ、何を索めていたことになるのか。丸善的なものからの遁走とは言つても、彼においては、それはまず己れ自身からの逃走でもあつたはずだが、そのことを彼はまだ充分には自覚していないようだ。

ひるがえって思うに、レモン一個を手にして、たちまちオスカー・ワイルド気どりで歩いたという青年、だが、その彼をとりまく舞台が、人参葉や豆や慈姑の並ぶ、「乾蝦<sup>ほしえび</sup>や棒鱈<sup>ぼうだら</sup>や湯葉<sup>ゆば</sup>」のぶら下がる

街々だと思つて何やら可笑しい。可笑しいが、この滑稽さは特に『檸檬』の主人公ひとりのものではあるまい。それは、言うならば、今になお尾を引く日本の近代そのもののおかしさなのかもしれない。

\*

「天才画家を夢みた者、政治家を、詩人を、科学者を、法律家を願つた者、……資本主義が整然と発達し切つたヨーロッパで、中産階級以下の家庭に産れた者が、所謂成功しようとするのは、橋のな

い大河を飛び越えるに似てゐる。二つの社会は大河の兩岸に在つて、偶<sup>な</sup>まに渡る者も成上り者の待遇を受けるのに、下層階級の青年達は、一生に一度の投機のように、一心不乱に越えられぬものを越えようと努力して、其の結果は破れた夢と、崩れかかつた軀を此処（サナトリウム）に運んで来る。

『それは夢ではなかつた。人間の誰もが願つて良いことであり、我々の努力は貴いものだつた。それが酬いられず、夢とされるのは、社会制度が悪いからだ』（芹沢光治良『ブルジョア』）

これは少々割り切りすぎた見方であつて、現実はいかほど明解ではないであろう。また、何もかも「整然と発達し切つた」とは言えない日本では、さらに事情が違ふということもある。しかし、にもかかわらず、明治から始まる日本の近代が、その基本のところではこれとよく似たかたちで、多くの青年たちの夢を喰ひ、滅してきつた事実も否定しきれないのである。正岡子規、樋口一葉、国木田独步、石川啄木……と、早逝した明治の文学者たちを思い出してみるだけでも、そのことは納得せざるを得ない。病気の範囲をもっと拡

げ、二葉亭四迷や北村透谷のような例まで上げれば、このリストは更に何倍かになる。彼らには、それぞれの立志の大きさに比例するかのように、貧困と病気がつきまといたのである。

梶井基次郎の時代は、しかしそうした事実の人々がようやく気づき始めた時代であった。

吉田は平常よく思ひ出すある統計の数字があつた。それは肺結核で死んだ人間の百分率で、その統計によると肺結核で死んだ人間百人についてそのうち九十人以上は極貧者、上流階級の人間はそのうち一人にはまだ足りないといふ統計であつた。(『のんきな患者』)

こういう絶筆を書いていた梶井基次郎の枕辺には『資本論』があつて、「こんな面白いものはトルストイの『戦争と平和』以来だ」などと友人に言っていたというようなエピソードもあるが、病床にあつた梶井基次郎にさえこうした言動をうながす、そういう時代だつたわけである。「のんきな患者」——誇り高いこの主人公は、自身の身の上を「社会制度が悪いからだ」などと甘えたことばで片づけようとはしていないが、しかし、自からその実証となつて滅びることを、彼は黙って覚悟しているわけである。

『資本論』ももとより丸善の棚を飾つたものだ。そのために、それを新しい香水や流行のネクタイのように身にまとう人々もあつて

混乱はまぬがれなかつたが、しかしこの新しい思想は、その根本では、丸善を大衆に解放しようという運動であつたことは言うまでもない。とすれば、資本主義社会を粉碎し、資本家どもを木端微塵にすべく、多くの青年たちが工場に、企業にダイナマイトを仕掛けに走つたように、『檸檬』の主人公もまた、文化的、文明的な意味での資本主義社会の象徴であつた丸善へ、ひとりてダイナマイトを仕掛けてきたのである。

そう考えて、私は『檸檬』の冒頭にたちかえる。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた。焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか——

主人公の生活を「蝕み」、学生という特権から「落魄れ」させてしまつた「えたいの知れない不吉な塊」——それは芥川龍之介の「将来に対するぼんやりとした不安」によく似たもの、時代のなかに文明文化の組み替えの必然を予感した者の「焦燥」であつた。新しい方向を予感はしたが、古いかたちですっかりでき上っている己れを知っているがための「嫌悪」であつた。旧文化の頂点にあつた芥川龍之介は、予感した新時代への不安に耐えかねて自ら消え去つて行つたが、底辺から、貧乏と病気のなかから旧文化の崩壊を体感していた、より若い『檸檬』の主人公は、自己否定を賭けて、旧文明を粉碎しようとした。それが丸善爆破ということであつた。